



オリンピズムの普及・浸透にとっての TOKYO2020

第45回JOAセッション

日時：2022年12月11日(日) 13:30~16:20

会場：明治大学和泉キャンパス

主催：特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー (JOA)

開催趣旨

オリンピズムの普及・浸透についてのTOKYO2020

“オールジャパン”のかけ声で国民の参画を呼びかけた東京2020大会は、新型コロナウイルス感染症の影響により、史上初の1年延期となるなど変容を余儀なくされた。コロナ以前の期待値に照らして振り返ってみても、無観客開催やボランティアの辞退など不完全燃焼となった感は否めない。それでも開催の遂行と周到な準備過程を通じ、得られた成果や意義は小さくないはずである。

JOAでは、東京2020大会開催が決定した2013年の翌年より「オリンピズムの普及と浸透」を活動目標に掲げ、JOAセッションにおいてはオリンピック教育や組織連携、オリンピックミュージアムなど、オリンピズムの普及と浸透に不可欠、効果的とみられるツールや機会、場などの役割やあり方を展望してきた。

そこで本セッションでは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会公式報告書など、今年になって様々な大会総括が行われたことも踏まえつつ、東京2020大会の価値を改めて評価したい。特に東京2020大会が、こうしたツールを実際にどう活用しつつ、オリンピック(或いはパラリンピック)運動の本質を社会に伝え、いかなるレガシーを残そうとしたのかを振り返り、JOAの今後の課題と役割を考える機会としたい。

日 時： 2022年12月11日(日) 13:30～16:20

会 場： 明治大学 和泉キャンパスメディア棟M302 および オンライン

主 催： 特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー (JOA)

後 援： 国際オリンピック・アカデミー
国際ピエール・ド・クーベルタン委員会
外務省
スポーツ庁
独立行政法人日本スポーツ振興センター
公益財団法人日本オリンピック委員会
公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会
公益財団法人日本スポーツ協会
公益財団法人ミズノスポーツ振興財団
一般社団法人日本パラリンピアンズ協会
特定非営利活動法人日本オリンピアンズ協会

協 力： 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム

プログラム

主催者挨拶 望月 敏夫 JOA会長

御来賓挨拶 登壇者未定

基調講演

「オリンピック史における東京2020大会」

真田 久 IOA科学委員会委員、元・東京2020組織委員会参与

古代・近代のオリンピックの歴史において、東京2020大会はどのような大会として特筆されるべきか、大会公式報告書に触れながらも、それには収まらないオリンピックの新たな価値創出と課題を振り返る。

パネルディスカッション

「東京2020大会はオリンピズムの普及・浸透にどう貢献したか」

昨年のJOAセッションでは、オリンピズムの普及・浸透の面からJOAが近年注目してきた学校やホストタウン、スポンサー、競技団体に焦点を当ててその影響等について検討した。本年度はさらに大学連携、日本オリンピックミュージアム、聖火リレーを取り上げ、その取り組みと成果を振り返るとともに、大会に関わる様々な問題など、昨今の社会情勢も鑑みながらJOAの今後の取り組みについて考えるヒントを得たい。

モデレーター: 結城 和香子 JOAセッション委員

①大学連携による大学と学生の変化

朴 ジョンヨン 神田外語大学体育・スポーツセンター准教授

2015年から全国の外語大学の連携のもと、通訳ボランティア育成プログラムが始められ、平昌2018大会、東京2020大会に学生たちを送り出した。ボランティアとして参加した学生の意識変化と効果、さらに全国外語大学連携の今後の展望等について語っていただく。

②日本オリンピックミュージアムを中心としたオリンピックの活動

谷本 歩実 JOC理事／オリンピック(柔道)

東京2020大会に向けたミュージアムでの取り組みとともに、JOCのオリンピック・ムーブメント活動におけるオリンピックの関わりやそこにある課題等について語っていただく。

③聖火リレーが灯した人々の心の灯

田口 亜希 東京2020大会聖火リレー公式アンバサダー／パラリンピアン(射撃)

Hope Lights Our Way／Share Your Lightのコンセプトの下、コロナ禍で大きく変容した聖火リレーは、人々にどんな影響を与えたのか。オリパラを通じ選手村の副村長だった体験も踏まえて、東京オリンピック・パラリンピック開催が社会に残した変化や今後への課題を語っていただく。

閉会スピーチ

舛本 直文 JOA副会長

主催者のご挨拶



特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー 会長

望月 敏夫

Mochizuki Toshio

第45回目となります令和4年度のJOAセッションがここに開催の運びとなりました。JOAの主要行事として年一回開催されるこの機会に、JOA活動の目的であるオリンピズムの普及と浸透をめぐり活発な議論が行われることを期待致します。

現在オリンピック・ムーブメントは内外で多くの困難な問題に直面しており、どう立て直すかが最大の課題となっています。内にあつては2020東京大会にまつわる汚職や談合等の疑惑が浮上し、最終的には裁判所の裁きを待つ必要があるもの、国民の目は厳しくオリンピック離れを加速させる恐れがあります。本来なら大会関係者自身が律するべきガバナンスの問題に司直の手が伸びたこと自体が問題です。

外からの脅威はもっと深刻です。ウクライナ危機下での2022北京冬大会やFIFAワールド杯カタール大会等で如実に見られるように、権威主義・強権主義的政権が自己の政治的利益でオリンピックを含むスポーツの基軸価値を棄損していることです。IOCやIOAをはじめとする世界のスポーツ界はこれに抗う努力を重ねていますが、権威主義国が数と力で民主主義国を凌駕しそうな現下の国際政治の中で、スポーツと政治の間合いの取り方に苦心しているのが実情です。

オリンピックは浮き沈みする国際社会の中でこれまでしばしば危機に直面して来ましたが、その都度すべてのステークホルダーが過去のオリンピック大会等の実績や反省に即し打開のための知恵を出して来ました。現在の我々も歴史に学ぶことにより、特に現代オリンピック史のホカホカの産物である2020東京大会の正と負の歴史を検証することにより、解決策を見出すことが出来ると信じます。その作業は様々な形で大会を直接経験した我々日本人の特権であり特技でもあると言えます。

このような問題意識に立って、本年度のJOAセッションは昨年度に続き2020東京大会の実績を多角的に分析・評価し、オリンピズムに対する逆風を順風に変える方策を探りたいと思います。オリンピックをめぐる議論はとかく観念論や理想論が先立ちますが、今回も大会の「現場」で活躍された生の声をお聞きしたうえで討論するというアプローチ法を取りたいと思います。

最後になりましたが、来場又はオンラインで参加頂いた会員及び関係者、ご来賓、登壇者の皆様に感謝申し上げます。また準備に当たったセッション委員会の皆様と会場を提供して下さいました明治大学にお礼を申し上げます。

祝辞



スポーツ庁 長官 室伏 広治

Murofushi Koji

第45回JOAセッションの御開催を、心よりお祝い申し上げます。

史上初の無観客開催となった東京2020大会から1年が経過し、7月には国立競技場で一周年記念イベントが開催されるなど大会を契機として創出されたレガシーを未来へ繋いでいくための取り組みが既に始まっています。

今回のセッションのテーマは「オリンピズムの普及・浸透にとってのTOKYO2020」です。東京2020大会の開催にあたっては、大会の意義やオリンピズムへの理解促進を図るため、全国の小学校、中学校、高等学校向けのオリンピック・パラリンピック教育の教材を公開してきました。また、全国の小学生による大会マスコットへの投票や学校観戦プログラム等の取り組みは、子どもたちが実体験を通して大会に参画するものであり、その教育的な意義は高かったと考えています。

加えて、東京2020大会の開催により日本国内の多様性や

共生社会への理解がこれまで以上に高まりを見せたことは特筆すべきことです。このようにして得られたレガシーを今後も継続していくため、スポーツ庁としましては、本年3月に策定した第3期スポーツ基本計画において、東京2020大会のスポーツ・レガシーの継承・発展に向けて6つの観点から特に取り組むべき施策を定めました。この計画をもとに東京2020大会を契機として得られた効果、創出されたレガシーを多方面へ波及させていけるよう引き続き取り組みを進めてまいります。

結びに、本セッションの開催にあたり御尽力いただきました特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミーの皆様をはじめ、関係者の皆様に深く敬意を表しますとともに、本セッションが有意義なものとなり、オリンピック・ムーブメントがますます発展することを祈念しお祝いの言葉といたします。

祝辞



公益財団法人日本オリンピック委員会 会長

山下 泰裕

Yamashita Yasuhiro

この度、第45回JOAセッションが開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

昨年開催されました東京2020大会は、新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、史上初の1年延期、そして、無観客での大会運営の中、多くの方々の支えにより、無事に開催することができました。

また、本年2月に開催されました北京2022冬季大会は、アスリート一人ひとりが、バブルの中、常に感染対策に向き合いながら挑んだ大会でした。その環境下、冬季大会としては、史上最高の成績を挙げたTEAM JAPANの活躍は国民の皆様笑顔に届けることができました。

両大会を通じて、アスリートたちが表現した純粋に競技に打ち込む姿、勝敗に関わらず対戦した相手をたたえ合う姿や笑顔は、私たちにとってオリンピックの価値を改めて感じる機会となりました。

今回のセッションのテーマは「東京2020大会が社会に残そうとしたレガシーを振り返り、大会の価値を評価すること」と伺っております。

1964年東京大会は、スポーツ少年団の設立、ママさんバレーの普及や生活環境の変化による女性のスポーツへの参加率の向上に貢献するとともに、トップアスリートにとっては、スポーツ医科学研究の発展により競技環境の整備に繋がりました。

東京2020大会は、スポーツをする、みる、支えることを掲げ、ボランティア制度の充実など多くのレガシーを生みました。私たちスポーツに携わるものは、これから50年、100年と続く新たなスポーツ文化を醸成していく使命があります。

東京2020大会の開催が決定してから、「オリンピズムの普及と浸透」をテーマとして活動してきた本アカデミーの集大成の議論となるべく、本セッションが皆さまの有意義な機会となることを願うとともに、開催に向けてご尽力された関係者の皆様方に心から敬意を表し、挨拶の言葉とさせていただきます。

祝辞



国際オリンピック委員会 会長 トーマス・バッハ

Thomas Bach

Dear Olympic friends,
Organising the Olympic and Paralympic Games Tokyo 2020 during the global pandemic was a historic achievement. These were unprecedented Olympic Games and it took an unprecedented effort from all our Japanese partners and the entire Olympic Movement, to make them happen in a safe way for everyone: the athletes and our gracious hosts, the Japanese people. Looking back today, this achievement becomes even more remarkable, given the constantly evolving environment we had to face. For the first time since the pandemic began, the entire world came together, making the Olympic and Paralympic Games Tokyo 2020 the Games of hope, solidarity and peace. As you discuss and evaluate the success of the Olympic and Paralympic Games Tokyo 2020 at the

45th Session of the Japan Olympic Academy, you also have a unique opportunity to highlight the important role of sport as a force for good in our fragile world. This is why I would like to thank everyone at the Japan Olympic Academy, under the leadership of your President Mochizuki Toshio, for your untiring commitment to spreading the Olympic spirit in Japan. The Japan Olympic Academy is a pillar of the Olympic community in Japan, inspiring the young generation with our Olympic values and promoting our shared mission to make the world a better place through sport. In this way, you are carrying the legacy of the Olympic and Paralympic Games Tokyo 2020 into the future. In the spirit of our new Olympic motto, Faster, Higher, Stronger - Together, I wish you fruitful discussions and a successful Session.

祝辞



国際オリンピック・アカデミー 会長 イシドロス・クーベロス

Isidoros Kouvelos

Dear Olympic Friends,

It gives me a great pleasure, once more, to address the Olympic family of Japan, on the occasion of the NOA's annual Session on evaluating Tokyo 2020 for the approaches to promote Olympism and Olympic Education!

The historic and extraordinary Tokyo Games 2020 was indeed a success, under adverse conditions. The Japan Olympic Academy, has set the objectives to promote the Olympic Values to the Japanese society, throughout the preparations of the Games and its realization. And this is actually the role of the NOAs, worldwide!

The NOAs being deep-rooted in the IOA's existence, constitute the main 'vehicle' that will transfer the education of the Olympic Values to the youth and the society. They are a fundamental tool in the IOA's mission and course of action with the education of hundreds of people and the implementation of Olympic Education programmes all over their country, in cooperation with different Institutions at a national and international level.

Olympic education is a dynamic process with sports as its core subject. It is an educational process in order for the youth to know and experience the Olympic principles and values through sporting and cultural activities, with a view to contributing to the balanced and harmonious development of their psychosomatic virtues.

The institutions of the Olympic Movement, and especially the National Olympic Academies, which are the landmark of Olympic Education, need to send a strong message, by educating the Olympic values of solidarity, respect, excellence, friendship to the young generation and embrace each one of them in this new reality. For a better future! The success of the Tokyo

Games, after the difficulties that needed to be surpassed, along with the decisiveness of the Japanese people and all the members of the Olympic family, have proved that the new approach by President Bach in the historic motto "Faster, Higher, Stronger - Together" shows even stronger the need of universal coexistence, which can begin from sports and end up in Global Peace. The war violence that the world is facing, following the Russian invasion in Ukraine, makes the word 'Together' echo in our ears, more intensely. Such word reflects characteristically the true character of Olympism. This new approach of the Olympic motto looks today more necessary to be followed than ever! And as I noted in my message in your last year's edition, "the successful Tokyo Olympics were a prime example of how to deal with a crisis in which flexible thinking, adaptability, sacrifice and compromise, but above all solidarity and unity, were at the forefront".

The Olympic Values, dear friends, are our guiding light! The IOA could not be affected by such circumstances, and with new strategic plans and development programmes, in cooperation with the IOC, we will support the existing active NOAs to continue with their work and safeguard their role in the Olympic Movement, reinforcing and strengthening the weak NOAs that have been assessed inactive for a long time. It is our duty to reinforce the presence of National Academies not only in their place of action but in the whole Olympic map.

I would like once more, to congratulate the NOA of Japan for its initiatives, the excellent work it has produced and for being part of the IOA's mission!

I wish you productive works of the Sessions!
Keep the spirit alive!



基調講演

IOA科学委員会委員、元・東京2020組織委員会参与

真田 久

Sanada Hisashi

東京 2020 大会は、オリンピック史上、特別な大会として刻まれるでしょう。それはパンデミック禍で1年延期され、原則無観客で開催されたこと、そしてその中で大会そのものをアスリートの輝きで完遂させたことです。新たに付加されたオリンピック・モットー “Together”、そしてパラリンピックで示された “WeThe15” も、重要なレガシーとなるでしょう。

今日のオリンピックは、クーベルタンにより古代ギリシャ時代の競技祭の復興として始められましたが、その始まりについて、古代ギリシャの地誌家パウサニアスは、当時の人々が苦しんでいた戦争と疫病から逃れる術をデルフォイのアポロン神に尋ねたところ、オリンピアで競技祭を行うよう神託が下った、と記しています。そこで神に奉納する競技祭が始まり、休戦協定（エケケイリア）を考案しました。

2021 年は古代オリンピック暦で第 700 回オリンピアース（オリンピアードに相当）初年に当たります。この時に疫病の問題が覆いかぶさったということは、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントが今日の世界に直面する社会的課題に向き合い続けねばならないことを示したともいえます。

第 32 回オリンピアードは 2020 年 1 月 1 日から 2023 年 12 月 31 日までで、東京 2020 大会に関わった人たちが責任を負う期間でもあります。この間に疫病と戦争が猛威をふるいました。前者については、ほぼ乗り越える目処が立ち、

そのことに果たした東京 2020 大会の意義は大きいでしょう。一方、オリンピアード期間中に起きた戦争については、その解決の目処が立っていません。オリンピズムは詰まるところ、個々の人間の内面の変革を促すものですが、現状は十分に達成されていないことは明らかです。このことは逆説的に、オリンピック・アカデミーの存在価値を示しているともいえるでしょう。

次に、パネルディスカッションの項目と JOA の関連を述べたいと思います。

・大学連携については、JOA は各大学に多様な講師を派遣する「出張講座」に大きく貢献しました。2022 年度に大学連携レガシーネットワークが後継として設立されましたが、この件でも JOA には大きな期待が寄せられています。

・聖火リレーについては、2016 年度のセッションで取り上げ、東京 1964 大会時のように、47 都道府県を回ることの重要性を確認しました。この声が届き、日数制限は緩和され、47 都道府県のリレーがコロナ禍で工夫して行われました。

・オリンピック・ミュージアムについては、世界大戦と感染症拡大直後のアントワープ 1920 大会の展示に会員が関わり、その大会で連帯のシンボルである五輪旗が掲げられ、選手宣誓や放鳩などが開会式で始められたことを示しました。



モデレーター

JOAセッション委員

結城 和香子

Yuki Wakako

パネル討論の司会を務めさせていただきます。オリンピックの普及・浸透という視点から、東京大会はどんなレガシーを残したのかを、各分野で実地に行動してきた方々の体験を手がかりにしつつ、皆様と考えたいと思います。

東京大会は、新型コロナウイルス感染症という未知の災禍の直撃を受けて、予防措置を最優先し、最小限の開催のあり方を追求しました。公道を走らない聖火リレー、観客のいない熱戦、それまでの「オリンピック」「パラリンピック」の常識が通用しないほど、大会は変容しました。筆者も取材者として30年近く、15大会のオリンピックを見て参りましたが、従来の価値観や祝祭感が当てはまらない東京大会に、違和感がぬぐえなかったほどです。

でも逆境をこえてきた選手たちの笑顔と躍動は、逆境にあった私たちの心にしみ入る何かを残してくれました。大会後に聞いた、こんな述懐を思い出します。

「困難な体験だったが、その中でオリンピックの中核の価値とは何かを考えさせられた。それは、世界の選手たちが集い、平和裏に競い合い、国や信条など様々な違いを超えて交歓することだ。それ以外はすべて二次的なものなのだと、東京大会の開催を突き詰める中で思い当たった」。

国際オリンピック委員会（IOC）幹部の本音です。

五輪憲章はオリンピックを、生き方の哲学であるオリンピックを広める祭典だとしています。その中核の価値が選手たちの競技と違いを超えた交歓にあるということは、近代五輪を創始し、100年以上主宰して来たIOCが考えるオリンピックの本質も、ここにあるということなのかもしれません。

政治や分断などの人が作りだしたしがらみは、人間性を高めることで超えられるということ。そして体と心を培うスポーツは、人の生き方や、より良い社会のあり方の可能性を見せてくれるということです。

変容し無観客となった東京大会では、オリンピックを広める従来の仕掛けが効果を発揮できたかは疑問です。でもその反面、逆境だったからこそ生まれ、私たちの心に刻まれた、輝きがあったことも事実なのだと思います。

オリンピックは今も、国際情勢の緊張や、不正がもたらす影に直面し続けています。私たちはオリンピックの価値をどう守り、未来に伝えていくべきなのか。そんな問いかけも念頭に、討論ができればと思います。



パネルディスカッション登壇者

神田外語大学体育・スポーツセンター准教授

朴 ジョンヨン

Park Jeong Yong

東京オリンピック・パラリンピック大会の開催が決まった翌年の2014年6月、日本にある7つの外国語大学（関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、神戸市外国語大学、東京外国語大学、長崎外国語大学、名古屋外国語大学（五十音順））により「全国外大連合憲章」が締結された。目的は、21世紀のグローバル社会に相応しい人材育成のために、様々な連携を図ることである。

2015年8月～2022年9月まで10回にわたり全国7つの外国語大学の学生を対象とした「全国外大連携通訳ボランティア育成セミナー」を開催した。受講生は、第1回から第10回までのセミナー修了後、多言語人材バンクに登録しており、卒業後にも国際スポーツ大会や様々な国際会議・イベントにおいて随時情報が届くようになっている。

これまで2,513名の修了者のうち、83%に当たる2,108名の学生が登録しており、セミナーで学んだ知識だけでなく、今後の国際大会においても、通訳ボランティアとして活動したいという高い意欲が示された。

また、東京2020大会に向けた全国外大連合の取り組みから導き出された教育成果をベースに、2018年にスポーツを軸に大学領域を越えた社会・人文・自然科学分野の幅広い教養・教育について考えることを目的に、神田外語大学をはじめ慶應義塾大学、上智大学、筑波大学、東京大学、立教大学、

早稲田大学で構成される「7大学連携スポーツ・リベラルアーツ講座実行委員会」を立ち上げた。2018年に第1回を開催してから、2020年までオンライン開催を含む延べ150名以上が受講してきた。参加者からは、オリンピック・パラリンピックについての基礎知識から、日常の授業とは異なる環境で、他大学の教員や学生との交流を通じて、貴重な学びになったとの声が聞かれた。

新型コロナにより延期となった東京2020大会を通して、現代の社会が抱えている諸問題及び課題解決に向けた大学連携の取り組みは、誰もがどこにいても学び得るオンライン化による教育方法や内容への変化の必要性をもたらした。

今後、フランスのパリ2024大会やアメリカのロサンゼルス2028大会等が開催される。まだ、世界中にコロナの収束が見えない中、これまでのオンライン教育の可能性をボランティア現場でも十分生かすことができるだろう。

具体的には、現地で活動する学生たちの様子をリアルタイムにオンラインでも見てもらうこともできる。ボランティア参加前の心構えや活動に必要な知識など、現場の雰囲気や伝えられれば、次回参加する学生たちに大きく響くものがある。学生たちに様々なボランティア活動に生かせる実践的な機会を多く提供することで、より豊かな共生社会の実現と学生の成長につながることは間違いない。



パネルディスカッション登壇者

JOC理事／オリンピック(柔道)

谷本 歩実

Tanimoto Ayumi

「オリンピックの文化が日本に根付き、多くの国民に愛され、私たちアスリートは、思う存分にオリンピックという夢の舞台へ挑戦することができます。」というのは、すっかり過去の話。オリンピックに対する世論調査の数字がリアルに現在地なのだと思えざるを得ないことにオリンピック人として無力ささえ感じます。オリンピック・ムーブメント活動を行う上で「オリンピズムの普及と浸透」をより図るためには、いま一度“オリンピックがクリーン”であることを証明していくことこそ目下の急務であると痛感します。

一方、東京でのオリンピック・パラリンピック開催が実現するまでの道のりで、2005年の招致活動から子供たちとの触れ合いを通し、「あの時に蒔いた種子は、確かに芽生え、育まれている。」そう実感する瞬間を幾度となく味わっ

てきました。昨今、オリンピックミュージアムを活用したイベントを通し、子供たちの豊かな創造力に限りない可能性と未来を魅せてもらいます。オリンピズムというフィルターを通し、スポーツが社会から信頼を取り戻すための取り組み、さらには社会に貢献できるスポーツの在り方について、新しいオリンピックのカタチを子供と大人が肩を並べて議論し合う「オリンピックの会議」があってもいいのではないかと期待に胸が膨らむばかりです。

2020東京オリンピック・パラリンピック大会を見届けた時代の証言者としてレガシーを着実につないでいくこと、さらには新たな時代のオリンピック文化を咲かせるためのオリンピック・ムーブメント活動に“希望の種子”を蒔くことが私たちオリンピック人としての使命だと感じています。



パネルディスカッション登壇者

東京2020大会聖火リレー公式アンバサダー／パラリンピアン(射撃)

田口 亜希

Taguchi Aki

東京 2020 大会では、オリンピック・パラリンピックを通じて、聖火リレーの公式アンバサダーや選手村の副村長などを務めました。

聖火リレーは、当初は日本全国を聖火がつなぎ、国立競技場に運ばれる予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の予防のため、会場内でのトーチキスのみとなった都道府県が多くありました。従来とは違う方法でしたが、参加された方々の感想などを拝見すると、皆様それぞれの想いを聖火に込められていたと感じました。

大会は、ほかにも様々な形でコロナ禍の影響を受けました。

パラリンピックでは 163 개국・地域と難民選手団（ロシア・パラリンピック委員会含む）から約 4,400 名のアスリートが出場しました。2013 年 9 月に東京大会開催が決まってから、「会場で観ていただきたい」、「会場を満員の観客にしたい」と私たちアスリートだけでなく、多くの関係者がおっしゃってくださり、また尽力いただいていた

ましたが、残念ながら無観客開催となり、会場で観ていただくことは叶いませんでした。

ただそのような状況でも、自国開催で時差がなく、テレビやインターネットなどで朝から夜遅くまで視聴いただくことができ、そして日本語のルール・クラス分け説明や、解説・選手説明などがあり、多くの方々から「パラリンピックが楽しかった」、「人間の可能性を感じた」と言っていたいただきました。大会後には、「開催してよかった」と思われた方が 7 割という調査結果も発表されました。

副村長を務めた選手村では、従来対面で行われる入村式かわりに各国の団長とオンラインで挨拶を行いました。そのような中でも、各国から東京大会が開催されたことへの感謝の言葉を多数いただきました。

色々な場面でたくさんの方々からいただいた思いを、ディスカッションを通してお伝えしたいと思います。貴重な時間を共有できることを楽しみにしています。

JOAセッションの歩み

1979	岸記念体育会館	オリンピックを振り返って／オリンピックの未来
1980	岸記念体育会館	古代オリンピア競技祭の繁栄／近代オリンピックの諸問題
1981	岸記念体育会館	オリンピックと政治／オリンピックと教育
1982	岸記念体育会館	我が国におけるオリンピック運動の展望
1983	岸記念体育会館	日本のスポーツ外交－その現状と今後の展望
1984	岸記念体育会館	オリンピックと政治
1985	岸記念体育会館	今後のオリンピック運動
1985	岸記念体育会館	オリンピックにおけるアマチュアリズム
1986	岸記念体育会館	オリンピズムと教育
1987	岸記念体育会館	オリンピズム、オリンピック運動、オリンピック競技大会
1988	岸記念体育会館	オリンピズムと学校教育
1989	岸記念体育会館	オリンピック・ムーブメントとマスメディア
1990	岸記念体育会館	女性とオリンピック運動
1991	岸記念体育会館	生涯スポーツとオリンピック運動
1992	岸記念体育会館	スポーツの商業化とオリンピック・ムーブメント
1993	岸記念体育会館	オリンピック復興百年を前に
1994	日本体育大学	オリンピック－21世紀に向けて
1995	高輪プリンスホテル	オリンピック運動の今日と未来、オリンピックの冬の競技、女性とスポーツ
1996	岸記念体育会館	オリンピック百周年－日本におけるオリンピック教育
1997	岸記念体育会館	オリンピック冬季大会とオリンピズムの将来
1998	霞ヶ丘競技場	オリンピックと教育
1999	代々木競技場	新しいミレニアムにふさわしいオリンピック、IOCの未来像
2000	大阪国際会議場	新世紀におけるオリンピック運動の展望
2001	国土館大学	オリンピックと環境－スポーツは地球を救えるか
2002	上智大学	フェアプレーの価値－フェアは夢か、幻か
2003	オリンピック記念青少年総合センター	アジアにおけるオリンピック・ムーブメント
2004	東京都立大学	東京オリンピックのレガシー
2005	筑波大学	オリンピックの日本招致とJOAの社会的役割
2006	上智大学	クーベルタンと嘉納治五郎の今日的役割
2007	上智大学	オリンピック・ムーブメントの課題に挑む－ドーピング・世代間交流・都市
2008	国立スポーツ科学センター	青少年とオリンピック
2009	明治大学	東京オリンピック・パラリンピック招致のレガシー
2010	オリンピック記念青少年総合センター	第1回コース・オリンピック・ゲームズと今後のオリンピック・ムーブメント
2011	国立スポーツ科学センター	アジアにおけるオリンピック教育
2012	茗溪会館・筑波大学	オリンピック教育の実践的展開
2013	明治大学	TOKYO 2020レガシー－国立競技場からの展望
2014	学習院女子大学	オリンピズムの普及と浸透－1964東京からの歩みと2020 TOKYOを見据えて
2015	武蔵野大学有明キャンパス	オリンピック・ムーブメントとこれからのミュージアムを考える
2016	立教大学	聖火 その価値と活用
2017	国土館大学	オリンピック・ムーブメントにおける文化的活動の意義と展開
2018	武蔵野大学有明キャンパス	オリンピック教育 継続と充実
2019	東海大学代々木キャンパス	オリンピック・ムーブメントに貢献するTOKYO2020レガシー その創出に向けたJOAの役割と新たな挑戦
2020	オンライン開催	オリンピックのソリダリティ
2021	オンライン開催	東京2020共生社会の創造に向けたチャレンジとこれから
2022	明治大学和泉キャンパス／オンライン開催	オリンピズムの普及・浸透にとつてのTOKYO2020

特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー

第45回JOAセッション

JOAセッション委員会

委員長：嵯峨 寿

副委員長：小口 貴久

委員：荒牧 亜衣 井上 雅規 大林 太朗 岡山 憂
真田 久 佐野 総一郎 高橋 誠 結城 和香子 和田 恵子


第45回JOAセッション実行委員会

委員長：嵯峨 寿

副委員長：小口 貴久

委員：荒牧 亜衣 石塚創也 井上 雅規 大林 太朗 岡山 憂 後藤光将
真田 久 杉並伸勉 佐野 総一郎 高橋 誠 結城 和香子 來田享子 和田 恵子

学生スタッフ：溝江 陸郎 吉村 歩由美 田川 智裕



特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー

第45回JOAセッション プログラム

発行日：2022年12月11日

発行：特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー 望月 敏夫

編集：JOAセッション委員会